

承久三年のブロッコリー

望月 苑巳

大皿の上にブロッコリーが
ストーンサークルのように配置されている
母が円形に怒鳴る

「残さないで野菜も食べるのよ」
そそくさとクラウチングスタイルのネズミ一匹
我ながら情けないと思う

ふむ、枕草子には
野菜はブロッコリーにかぎると、あつたな
清少納言の仕草を真似て
定家卿は扇を口に含み笑い
きのう化野念仏寺で密会した女子は
顔色が暗く折りたたまれていたが
後白河院の言葉をなぞれば
すべてはうつつよ、たわむれよ、となるか
十三歳年上の才女に手向けた一首を
思い出して年甲斐もなく心ときめかせる

床の霜枕の氷消えわびぬ結びもおかぬ人の契りに
＊

ぼくは枕草子を閉じると
ブロッコリーにたつぷりマヨネーズをからませて
ガブリと食らいつく
苦くて柔らかい愛情が口の中にだらしなく広がる
十七歳で深海魚になった弟が

欄間でアッカンペーをしている
もう喧嘩もできない淋しさが
茹でたてのお鍋から立ちのぼる
承久三年のブロッコリーが
本の中で弟の分まで茹であがった

＊
藤原定家